

釜が淵の大鯉

その昔、氏家の鬼怒川沿いに築かれた勝山城は、当時宇都宮城の北東を守る重要な城でした。城の西側は、下を流れる鬼怒川の流れが突き当たり深い淀みをつくり、岸辺は断崖でした。当時人々は、ここを釜が淵と呼んでいました。

この勝山城が大軍に攻められて、

落城の危機が迫っていた時のこと、お城には、お雪様とお花様という二人の美しいお姫様がおりましたが、姫の身の上を案じた城主は、勝山城の菩提寺である円満寺に二人の身をかくまわせました。お姫様が寺にかくまわれてまもなくのこと、城はついに落城してしまい、城主や家臣たちすべてが討ち死にしてしまったのです。ほどなくこのことを知った二人のお姫さまは、

「わたしたちは、これから誰を頼りに生きていけばよいのでしょうか、この先どうすればよいのでしょうか。」



と、父母のことを思い毎日嘆き悲しんでおりました。

円満寺は、東芦沼にあり、ちようど勝山城の真西にあたります。夕方になると二人の

お姫様は鬼怒川の堤に立ち、夕焼けに照らされ、あたかも炎上しているような勝山城の
辺りを眺めながら、涙する日々が続いたのです。

何日かたった日のこと、二人のお姫様はひそかに父や母のもとに行くことを誓いあつ
たのでした。夕闇迫るころ、二人は誰にも気付かれぬように、手を取り合つて円満寺を

後にしました。

勝山城に着いたのは、日もとつぷりと暮れ、松の枝ごしに月影のこぼれるころでした。

二人のお姫様は、それぞれ真っ白と真っ赤な着物を身にまとい、長い袖を夜風になびか

せお城の松の木の根元に立っていたのです。崖の下には釜が淵の青黒く淀んだ流れに、

月が揺らめいていました。二人のお姫様には、その揺らめいた月が父母の顔に見えたの

でした。

「わたしたち二人は、もうすぐ父上、母上のもとに参ります。」

と、手に手を取り合つて、天女が舞うがごとく着物の袖をひらめかせ、身をひるがえし、

その淵に消えて行つたのです。するとどうしたとか、青黒く淀んだ淵に身を投じたお

姫様の姿は、見る見るうちに二匹の紅白の大鯉の姿になつて、淵深く消え去つていつた

のです。淵の流れは何事もなかつたように静かに月を浮かべて流れていました。

つきひ 月日がたったある夏の夕暮のことでした。かつやまじょう 勝山城の対岸の芦沼に住む漁師が、いつものように釜が淵で投網を打っていました。

「ああ、今日は何もかがんねえなあ。やめっぺが、いやまでよ、もういっぺんうってみるとすんべ。」

ぼやきながら、再び淵の上流の浅瀬をめぐりながら投網を打ちました。網は夕日に照らされて、大きな輪を描きながら流れに消えました。漁師は、

「何か、でけえのでもはいんねえがなあ。」

と、網づなを絞ろうとすると、網は何かに引っ掛かったようにびくともしませんでした。

「あんれ？石っこにでもひっかがりやがったかな。」

漁師は網づなをたぐりよせながら流れの中に入っていく、投網の中をそっと覗きこむと、その中には、何と二匹の紅白の大鯉が網にからまり、苦しそうにもがいているではありませんか。それを見た漁師は手足をふるわせ、

「やや！こりやでけえや！逃がしてなるもんか。」

と、必死で網を手繰り寄せました。

二匹の紅白の大鯉を投網の中に見た漁師は、

「いやいや、今日は大漁だわい。」

と、喜び勇んでその鯉を慎重に魚籠の中に取りこみ、背負い籠に入れ、夕暮の河原を家

路に急ぎました。しばらく歩き、堤も近くなり、日もとっぷりと暮れかかったころのことです。背負っている籠の重さが急に重くなってきたのです。漁師は、
「おお、重いなあ。」
と、籠ひもに手をあてた時のことです。

「もしもし、もしもし。」

と、弱々しい女性の声がどこからともなく聞こえてきたではありませんか。

「いったいこんな時分に、おれを呼ぶのはだれだんべや。」

と漁師は薄暗くなった辺りをきよろきよろと見回しましたが、人影などだあれも見当たりません。しばらくすると、また、

「もしもし、もしもし。」

と、先程と同じような声が聞こえてきました。漁師は気味が悪くなり、その場に籠を置き去りにして一目散に家まで逃げ帰りました。置き去りにされた籠の中からは、

「お雪!!!」

「お花!!!」

と、呼び合う声が聞こえたのです。そして、その声がだんだんか細くなり、辺りにもとの静けさがもどったころ、籠の中の二匹の紅白の大鯉は、忽然とその場から姿を消してしまっていたのでした。

……もとの釜が淵にもどったのでしようか……
その日以来、漁師は高熱を出し、重い病に臥せって
しまったといひます。

村人たちは、

「この釜が淵にいる二匹の紅白の大鯉は、勝山城の
二人のお姫様だったのだんべ。」

とささやきあったのでした。

その後、この淵では誰一人として漁をする人は見ら
れなくなつたといひことす。

今でも夕暮れになると、

「お雪!!!」

「お花!!!」

と、呼び合う声がどこからともなく聞こえてくるとい

われています。そして夕闇迫るところになると、淵の辺りには「ボーツ」と白煙が立ち登
り、二人のお姫様の姿が現れるのだとか……



円満寺にあったといわれる石碑